

『ダゲレオタイプの女』——生の痕跡 黒沢 清

(映画監督)

『ダゲレオタイプの女』に登場した、巨大なダゲレオタイプカメラのセット。奥行きのあるこの姿は映画の中では確認できない。貴重なカット。



映画『ダゲレオタイプの女』(二〇一六年)には巨大なダゲレオタイプカメラが登場する。等身大写真に永遠の生を感じる写真家の前に、被写体だった妻の亡靈があらわれ、生と死の境界が次第にぼやけてゆく。黒沢清監督はなぜダゲレオタイプをテーマにしたのか。その着想を訊ねた。

——『ダゲレオタイプの女』の着想はどこから得たのでしょうか。

黒沢 一九九九年ごろ東京都写真美術館でたまたまダゲレオタイプ写真に出会ったことがきっかけです。二枚の写真が印象に残りました。一つは少女の肖像写真。目を見開いて、喜んでいるのか怖がっているのかわからない奇妙な表情。解説文によると、ダゲレオタイプ初期の写真で、露光に一〇分間かかるつたそうです。一〇分間、絶対動いてはいけないと言われると、人間はこんな緊張感に満ちたなんとも言えない表情をするんだなあ、と。僕たちが日常にする人の顔とはまったく違う。俳優に「こんな顔をして」と言つても、

カシャッと撮られて魂を抜かれるというのがあまり実感がないのですが、金属板を見ると実感としてわかりました。——ステファンについて助手のジャンが「今は写真と現実を混同して、生者と死者を区別できない」と評するセリフもあります。幽靈と生きている人の間に写真というものがあるということですか。

黒沢 幽靈について真剣に考えを巡らせるのはなかなかやつかいですね。死のものについても、例えば戦場だとそれはまったく日常的な光景なのでしょうが、僕たちの今の生活中では想像を絶する出来事です。死は現実なのかどうか。もし現実の一部だとしたら、写真に写つてもおかしくない。ただ、写真がほとんど現実にそつくりでありながら、現実そのものかというどこか違うように感じる。「では僕らが現実だと思つてゐるのは本当に現実なのかな?」と迷うことは、日常の小さなレベルでもよく経験するんですよ。例えば海に行って「わあ、広い」と

まず無理だろうと思いましたね。

もう一つは、同じく長時間露光の写真で、町並みが克明に写っていますが無いんです。人も馬車も何一つ写っていない。二分、三分という長時間露光だと、動かないものだけがくつきり写つて、動いているものは写らない。

当たり前のことなんですが、現実には誰も目にできない景色でしょう。動いているものを「生きているもの」とすると、それがまったく写っていない町は「死の町」のよう。この二つの写真に感銘を受けて、「生きている者と死んだ者の関係を表すストーリーができないかしら」と脚本を書きました。

——映画の中に亡くなつた子どもの記念写真を撮るシーンがあります。写真には死者をこの世に留めておく意味があると思われますか。

黒沢 そうですね、本物のダゲレオタイプの写真を手に取つて見たときに、ズシッとした重さを感じたんです。百数十年前に生きていた人の姿が克明に金属板の上に刻まれていて、単に記録として残しているというレベルを超えて残してあるといふ意味があります。

——日本の「写真を撮られると魂を抜かれる」という迷信と似ていますね。映画では、写真家・ステファンがダゲレオタイプの写真について「存在そのものが銀板に固定される」と言つていてしまつた感覚になるということが現物を見てよくわかりました。

黒沢 そのセリフは、まさにバルザックの言葉にヒントを得て書きました。

写真を撮つて、後から写真を見たらまったく広くないということはよくあります。自分が見た海と写真の海は全然違う。どちらが現実なのか。「広い」と感じたのはあなたがめつたに海を見ないからそう思つただけ。一種の妄想である」と言われば、写真のほうが現実なわけですね。でも、ふだん見慣れた人であつても、写真で見ると実物とは違う感じがすることも珍しくありません。写真の中の「現実のようなもの」は、自分が現実だと思っているものと微妙に食い違つていて、どちらが現実かわからない。それを飛躍させれば、写真の中にふだん見えない死者がふと紛れ込むことは十分あります。そんなことを漠然と考えながら、このセリフが出てきたんだと思います。

——写真の中の現実と自分が見た現実が異なるという話は、映画ではどうでしょうか。頭に描いた映像と、撮つた映像が違うものになつてしまつた経験はありますか。

この続きは本誌でどうぞ!